

## 岩手におけるウーマンリブと生活記録運動(1)

—1950～60年代における小原麗子の自己表現活動を軸として

柳 原 恵\*

### Women's Lib and the "Seikatsu-Kiroku" Movement in Iwate (1):

Focusing on the Self-Expression Activities of OBARA Reiko in the 1950s-60s

YANAGIWARA Megumi

#### abstract

Obara Reiko (1935-) is a leader of the "Seikatsu-Kiroku" (Life-Writing) movement of the young person's association in Kitakami city, Iwate prefecture in the 1950s -1960s. The purpose of this paper is to discuss the relationship between the "Seikatsu-Kiroku" movement and Women's Lib in Iwate through Obara's claims about gender issues in the "Seikatsu-Kiroku" anthologies.

In the "Seikatsu-Kiroku" movement, young rural women, including Obara, wrote about their own daily lives, using their own voices. By writing about their own lives and reading about those of others, the participants in this movement shared their experiences of gender discrimination with other women and increased the consciousness of gender issues that rural women faced. This process is thought to be similar to the consciousness-raising of the Women's Liberation movement.

Furthermore, the act of writing itself was a form of resistance against the gender structure of rural villages. By writing about their lives in the cultural context of a rural village in which women were culturally and traditionally discouraged from writing, they also rewrote the history of rural women.

Key words: Women's Lib, Iwate, "Seikatsu-Kiroku" (Life-Writing) Movement, young people's association, rural women

#### はじめに—東北地方とウーマンリブ

ウーマンリブ（以下リブと略記）とは、1960年代末から1970年代にかけて主に先進国で勃興した女性解放運動である。日本のリブは戦前期の女性の権利獲得運動や戦後民主主義に依拠した理念的な男女平等論の枠組みを疑い、女性自身に内在化している性差別を支える意識や構造の変革を求めたという特徴がある<sup>1</sup>。リブは1970年10月21日の国際反戦デーに“ぐるーぷ・闘うおんな”などの複数の女性グループが共同でデモをしたことに始まり、リブ新宿センターが閉鎖した1977年に終わったというのが定説となっている<sup>2</sup>。しかし、「東京のデモ」と「リブ新宿センター」を基準として、いわば東京中心主義的にリブを記述することで、日本のリブの全国性、同時多発性を覆い隠してしまうという問題がある<sup>3</sup>。確かにリブに関する資料集成である『資料日本ウーマン・リブ史 I～Ⅲ』（1992、1994、1995）に収録されているグループのうち、8割以上が東京、大阪等大都市を拠点として

---

キーワード：ウーマンリブ、岩手、生活記録、青年団、農村女性

\*平成22年度生 ジェンダー学際研究専攻

いる。藤枝濤子はこのリブの「局地性」について、当時の女性の多数を縛っていた「地縁、血縁、世間体」などの「慣習」のしがらみから相対的に自由な女性が、大都市には運動を構成しうほど集団として存在できたからではないかと推測する<sup>4</sup>。だがリブに共感し、行動を起こした女性は地方社会にも確実に存在した。

例えば東北地方に限定して見てみよう。『資料日本ウーマン・リブ史Ⅱ』には、「東北大学生理用品無料設置要求実行委員会」(宮城県)と『美々のてがみ』(青森県)が掲載されている。『リブニュースこの道ひとすじ』12号(1974)には「東北リブ合宿(みちのくおんな合宿)」が開催されるとの予告が、『リブニュースこの道ひとすじ』14号(1974)「東京ばかりがリブじゃないー花の地方のリブ情報」として仙台のリブグループが紹介されている。また雑誌『女・エロス』5号(1975)には、石川純子<sup>5</sup>個人誌『垂乳根の里便り』(岩手県)所収のエッセイ「垂乳根の里へ」(1974)が収録されている。リブは、東京のデモやリブ新宿センターを以って代表できるような単一の運動体ではなかったのである。

以上の問題意識を踏まえ、本稿では従来のリブ研究において注目されてこなかった東北地方、特に農村地域におけるリブに着目する。これまでの研究や論考が描いてきた近代以降の農村女性は、過酷な重労働と家や地域社会からの差別を耐え忍んで生き抜く健気さが強調されるか、「民主化」や女性解放の動きに対して「遅れた」存在として位置付けられるかであった<sup>6</sup>ことを踏まえると、東北農村部のリブ女性はこれまでの農村女性像を書き換える存在であると言える。リブは私的領域における性差別を告発し、近代のジェンダー構造を批判してきたが、農村の女性たちが経験した「近代」の内実は都市部のそれとは同様ではなく、異議申し立ての内容や方法も異なっていたと思われる。

本稿では、東北・岩手の農村部においてリブ的な視点を持ち活動してきた人物として、小原麗子(1935～)に注目し、取り上げることにする。そして、小原のリブ思想形成の基盤となったと目される、1950年代から60年代にかけての青年団における生活記録運動に着目し、考察する。

## 1. 岩手における生活記録運動の展開

### 1-1. 1950年代から1960年代における北上市の状況

小原麗子は1935(昭和10)年、岩手県和賀郡飯豊村成田(現北上市)の小作農家に5人きょうだいの次女として生まれた。小原が生まれ育った北上市は、内陸南部の北上盆地中央に位置している。1954(昭和29)年、和賀郡の中心部である黒沢尻町を中心に、和賀郡飯豊・更木・二子・鬼柳の4村、胆沢郡相去村、江刺郡福岡村の1町6村が合併して市制が施行された。のちに上成田地区が花巻市に、六原地区が胆沢郡金ヶ崎町に分離、江刺市広瀬の一部が編入され、1991(平成3)年には北上市・和賀町・江釣子村が合併し、現在の市域となる。人口は1955(昭和30)年、42,088人、1965(昭和40)年42,979人と、盛岡市、花巻市、宮古市、釜石市、一関市に次ぐ規模の市となった。

市制開始後、企業誘致が始まり、工業団地が造成され県内有数の工業地帯へと発展していく北上市<sup>7</sup>だが、1950年代においては農村地帯であった。農地改革前後の小作地の割合を比較すると、改革前の31.4%(1946(昭和21)年)から9.9%(1951(昭和26)年)へと大幅に減少している<sup>8</sup>。1955(昭和30)年の農家人口が総人口に

表1 中学校卒業者数およびその進路(1951(昭和26)年)

進路 地域	中学校卒業者数			上級学校への進学			就職			無業、その他		
	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計
岩手県	14,844	13,940	28,784	5,925	4,772	10,697	8,011	7,653	15,664	908	1,515	2,423
				39.9%	34.2%	37.2%	54.0%	54.9%	54.4%	6.1%	10.9%	8.4%
和賀郡	1,204	1,094	2,298	578	464	1,042	528	523	1,051	98	107	205
				48.0%	42.4%	45.3%	23.0%	47.8%	45.7%	4.3%	9.8%	8.9%
飯豊村	66	50	116	16	4	20	50	46	96	0	0	0
				13.8%	8.0%	17.2%	43.1%	92.0%	82.8%	0.0%	0.0%	0.0%

注)「就職」には家業手伝い等を含む。

岩手県編『岩手県統計年鑑』(1951)より作成

占める割合を市内地区別に見ると、和賀郡一帯を後背地とする商業地・金融街であった旧黒沢尻地区を除いて8～9割となるなど、農業が基幹産業であった。

当時の岩手県における高校進学率は37.2%（1951（昭和26）年）、40.5%（1955（昭和30）年）であり、これは全国の高校進学率45.6%（1951（昭和26）年）、55.4%（1955（昭和30）年）と比較するとかなり低い。小原麗子が中学を卒業した昭和26年の和賀郡における進学率は45.3%と全国平均程度だが、飯豊村に限ると男性13.8%、女性では8%に過ぎない（表1）。農家人口が8割を越える<sup>9</sup>この地域では「貧しくて高校に進学させられないのは、あたりまえ」（小原麗子「女中奉公ということについて」『通信・おなご』第7号、1977）だったという小原の記述を裏付ける状況となっている。中学の時、初めて見た釜石の海を詠んだ詩がコンクールで入選したことをきっかけに詩を書き始めた小原は、成績優秀だったこともあり進学を望んだが、実家の経済状況がそれを許さず、中学卒業後は実家の農業を手伝っていた。農民は「詩を作るより田を作れ」、「おなごなればいっそう、『本などは読まずともいい』（小原麗子「あとがき」『小原麗子詩集』1978）という農村の文化の中、小原は「詩集の一冊も読まずに、詩を書いていた」（小原前掲）。

## 1-2. 岩手における青年団活動

敗戦後、占領軍により青年団民主化が図られ、全国的教化組織としての大日本青年団は解体し、1951（昭和26）年には新しい統一組織として日本青年団協議会が発足する。小原が活動した岩手県においても同年3月に岩手県青年団体協議会が発足していた。「貧しさからの脱出」をテーマとし、男女平等の旗印の元、男女青年合同での活動が始まった<sup>10</sup>。岩手県下の地域青年団は1952（昭和27）年759団体56,324名（内女子会員19,492名）、1955（昭和30）年839団体44,863名（同13,712名）であり、1951（昭和26）年から1956（昭和31）年にかけて700～800団体前後で推移している<sup>11</sup>。1956（昭和31）年の県下青年団構成員の職業を見ると、第1次産業に就いているものが男女ともに約8割を占めている（表2）。また学歴区分は初等教育が77%、中等教育（旧制中学等を含む）は21%となっており、青年学級<sup>12</sup>と同様、上級学校への進学が許されなかった勤労青年を取り込んでいったことが分かる（表3）。また、女子の場合は25歳以上の団員が約2%と非常に少ないが（表4）、これはほとんどの女子青年が結婚を機に退団することが理由である。

表2 従事産業別青年団員数（1956（昭和31）年）

産業形態	第1次	第2次	第3次	その他	計
男子	21,052 78.4%	2,121 7.9%	3,051 11.4%	641 2.4%	26,865
女子	11,871 81.4%	724 5.0%	1,359 9.3%	633 4.3%	14,587

表3 最終学歴別青年団員数（1956（昭和31）年）

最終学歴	初等教育	中等教育	高等教育	その他	計
実数	31,989	8,847	353	261	41,450
割合	77.2%	21.3%	0.9%	0.6%	

表4 年齢・年代別青年団員数（1956（昭和31）年）

年齢	15～19歳	20～24歳	25～29歳	計
男子	10,467 39.0%	13,512 50.3%	5,604 20.9%	26,865
女子	8,739 59.9%	5,604 38.4%	244 1.7%	14,587

（注）中等教育には旧制中等および新制高校卒を含む

表2～4は岩手県社会教育課『岩手の社会教育 青年教育婦人教育—青年教育婦人教育の現状と問題点』（1956）より作成

## 1-3. 青年団による生活記録運動の展開

青年団が集団学習活動の一環として取り組んだのが生活記録運動であった。生活記録運動は1930年代に始まった子供の生活綴方運動の影響を受けて生まれたと言われている<sup>13</sup>。生活綴方運動とは、自分の生活を自らの言葉で表現する“綴方”を通じて社会認識を深め、主体の形成を目指す民間教育運動であり、主体が青年で社会教育を中心にするものを生活記録運動と呼ぶ。これらは画一的な教育を内部から変革する運動として大正期に始ま

り、1930年代には軍国主義に抵抗する教師を中心に全国的な広がりを見せた。東北地方においては、東北の土壤に根差した北方教育運動として展開し、秋田県の「北方教育同人社」を中心として、『稗和人』（和賀町）、『工作・岩手国語』（東磐井郡）など各地に文集制作を土台とした研究集団ができた<sup>14</sup>。

そして戦時期の厳しい弾圧を経て、戦後、民主化の気運の中で民間教育運動として復活する。岩手県においても1951年に出版された『やまびこ学校』を端緒とし、戦後民主主義の潮流に乗って学校から地域の青年たちへと急速に広がっていた。青年団における生活記録運動発足のきっかけについては湯田村や和賀町のように教育委員会の社会教育係が外部リーダーとして青年会に働きかけ、指導していった例と、沢内村の『アカシア』『こだま』のように『葦』等の全国的な人生雑誌<sup>15</sup>の刺激を受けた内部リーダーによる地域の活動として起こった例とがある<sup>16</sup>。本稿で取り上げる『ばんげ』は後者の例である。小原は17歳の時に父親を亡くし、たびたび持ち掛けられた縁談を拒否して1954（昭和29）年19歳の時、叔父の戦友の伝手で静岡県沼津市へ女中奉公へと出かけた。1955（昭和30）年に帰郷、再び実家の農作業に従事する傍ら『葦』等を愛読し、作品を投稿していた。小原が地元の成田青年会に参加するようになるのはこの頃である。成田青年会は大正時代には活動の記録が見られる歴史を持つが、北上市制開始後の1954（昭和29）年10月、旧成田地区が北上市と花巻市に分れたことにより、新北上市青協の単位団として新しく出発していた。小原は『葦』を愛読していた理由について、誌上に自分と「同じような境遇の人たち」、つまり貧しさ故に進学が適わなかった農村の若者達がいたことを挙げている<sup>17</sup>が、村の青年団に参加する理由もここにあった。

青年団による生活記録文集は1940年代後半から生まれ始め、1950年代半ばに発刊のピークを迎える<sup>18</sup>。北上市内では青年団による生活記録運動文集は1953年から1962年にかけて12のタイトルが発刊されている（表5）。しかし『ばんげ』と新聞に近い『なか』を除き、いずれの文集も創刊号あるいは2、3号という短命で終わっている。この理由として、生活記録運動は市青協による活動方針針が打ち出された組織的運動ではなく、地域青年会（単位団）レベルでの自発的な運動であったことが挙げられる。数年に渡って運動を牽引できるリーダーがほとんど育たなかったのである<sup>19</sup>。次項以降で詳述するが、創刊から18号を数えるまで生活記録の内部指導者として『ばんげ』を発行し、さらに今日まで継続的に活動を続ける行動力を持った小原は当地において希有な存在であることが伺える。

表5 北上市内における青年団発行の生活記録運動誌

誌名	団体名	創刊年月	刊行状況、備考
えんで川	飯豊町飯下青年会	1953年7月	創刊号のみ
二子	北上市青協	1954年9月	青研修会記録記録として発行
なか	飯豊町中組青年会	1956年(?)	21号は1956年11月、1957年5月25号（終刊）
ばんげ	飯豊町成田青年会	1956年3月	1961年2月18号（終刊）
芽っこ	黒沢尻町第三区青年会	1957年3月	創刊号のみ
くろいわ	黒岩青年会	1959年1月	3号（終刊）
立花青年会誌	立花青年会	1959年2月	2月創刊号、4月2号（終刊）
らくがき	鬼柳町青年会	1960年	1961年2号（終刊）
ことりざき	小島崎青年会	1961年1月	4号（終刊）
めっこめし	青年建設班第3期生	1961年4月	記念記録集として発行
とっしん	青年建設班第4期生	1961年9月	記念記録集として発行
いねむり	青年建設班第6期生	1962年9月	記念記録集として発行

千田茂光「生活記録」北上市青年団体協議会編『北上青年運動史』（1965）より

## 2. 小原麗子の生活記録文集刊行活動

### 2-1. 『ばんげ』の創刊

小原は1956（昭和31）年3月に成田青年会<sup>なりた</sup>の女子会員3名で生活記録文集『ばんげ』（成田青年会編、1956年

創刊号～1961年18号)を創刊する。「ばんげ」とは硬木で作った板のことで、集会所の軒下にあり合図に使った生活用具である。創刊号の冒頭において小原はこう呼び掛ける。

書くことなんて〔略〕中学を卒業すると共に忘れていたように思うのです。けれども〔略〕書くということによって、自分の思っていることが、はっきりしてくるかもしれないのです。〔略〕わたし達は人に言えない悲しみや悩みをここに書き合ひ語り合っていこうではありませんか。〔略〕書く、そこには問題の端緒が提起されてくるでしょう。(小原麗子「はじめに」『ばんげ』創刊号、1951年3月)

『ばんげ』は集落の貧しい農民たちの心に「深く隠されている」悩みを「書いて発表し、問題としてつかんでゆく」ために「ほんとうのことを喋る場所、それを育てていく場所」(小原麗子「あとがき」同前)を目指して作られた。編集にあたっては会長や編集長といった代表者を中心とするのではなく、会員が代わる代わる文集作りの主力となった。そこには芸術性のみを求める「立派な」文芸同人誌への否定的意識が働いており、自分たちの悩みや悲しみを表現し、問題のありかを探り、皆で対話しようとする姿勢があった<sup>20</sup>。

実はインタビューによれば小原自身は『ばんげ』創刊時の1956年の段階で生活記録という運動を知らなかったのだという。初めて「生活記録運動」という言葉を知ったのは県下の指導者講習会に参加した時であり、所属する成田青年会が組織末端の単位団であることを認識したのもこの時だったという<sup>21</sup>。ただし『ばんげ』の創刊は直接的には全国的な人生雑誌に影響されていたものの、小原自身が今から思えば「野火のように広がった」サークル運動の「渦の中」にいたのだと語る通り、北上市内外で展開されていた運動にその下地があったとも言えるだろう。

成田青年会の特色は女子会員が多く在籍していることであった<sup>22</sup>。会員の年齢は10代後半がほとんどで、過半数が農業に従事していた(表6)。『ばんげ』は会員の生活記録、時事問題の論評、詩や短歌、私信等で構成されている。現存する15号、16号、17号の寄稿者の性別について見てみると、15号では寄稿者16名中11名、16号は16名中10名、17号は13名中8名が女子会員であり、また創刊号から11号までのの中から作品を採録したアンソロジー『ばんげ』(昭和33年6月15日)に収録された26編の作品の内、19編が女子会員の作品である。ここから『ばんげ』が成田地区の女子青年の主張の場となっていたことが推測される。

『ばんげ』の編集に携わっている人達がいつも話題にしたことは、農村における女性のあり方ということ(小原澄子「農村における女性」『ばんげ』10号)であった。同じ地区の複数の娘たちに同じ男性との見合い話を持ち掛けるといふ仲人のあり方と、それを侮辱として縁談を断った娘たちへの陰口を「姿なき暴力」であるとする小原睦子の「姿なき暴力」(2号)、毎日の「洗濯」を「仕事」とは認識しない男性の現状を批判し、自分の衣類は自分で洗濯するよう呼び掛ける伊藤静江「主婦と洗濯」(8号)など、実体験から性差別や女性の重労働を問題化する生活記録や詩が多く掲載されている。

小原はこの頃冬の農閑期を利用して飯豊農業共済組合に勤めるようになり、やがて飯豊農協の職員となる。職業を持っている会員が多いために活動時間帯が夜間に限られる中、小原は仕事と並行して青年団活動にも精力的に取り組んでいく。

生活記録運動において特徴的なのが、生活記録詩と呼べるような形態の作品が多く詠まれていることである。小原も『ばんげ』誌上に村の中での女の位置を問題化するような生活記録詩を多数発表している。その中の一編が「母と反物」(11号)である。小原の母は、「5人の子を育てるために/ずっと遠い昔から」「新しい着物を作ったこと」がなかった。22歳になった小原が給料の一部で母へ反物を贈ったところ、「一度に二反も/生まれてはじめてだ」と喜ぶ母の姿を詠んだ生活記録詩である。

この頃、わたしは/母と口げんかをあまりしなくなりました/今まであんまり/親泣かせの娘だったものだから/出来る限りの



写真1 『ばんげ』15号

表6 成田青年会の女子会員の職業・年齢(昭和37年)

職業	年齢						計
	16歳	17歳	18歳	19歳	20歳	25歳	
家事(農業)	1		2	3	1		7
工員		1		1			2
洋裁編物学院生			1	1			2
団体職員						1	1
計	1	1	3	5	1	1	12

小原麗子「娘の一日の生活時間」(『ささえ』5号)より

ことを/してやろうと思っています。〔略〕この頃、わたしは/母の生き方や態度の批判をあまりしません/22歳になって/わたしは母のよこぶのを見ながら/むしよになきたくなることあるのです（小原麗子「母と反物」『ばんげ』11号）

ここでは自己の欲望を抑圧し家と子の養育に尽くしてきた母の姿に静かな同情的視線が送られている。だが小原は「農村の嫁の悲劇が生まれる原因は、多くの家族的な美しさのなかにもあると思う」（小原麗子「〔考〕労働・家・家庭・家族・嫁」『ばんげ』17号）として、農村女性たちが「家」の中で磨滅してしまう現状を問題化し、こうした母の生き方を「家族的な美しさ」として理想化するような母性像には与しない。生活記録運動の中で「父や母にも歴史があるんだってこと」を大きな衝撃とともに学んだ<sup>23</sup>小原は、ただ忍従してきた母を単純に批判するのではなく、母のあり様を歴史化し、母に向き合い母を書くことで、女を嫁としてしか生かさな社会への批判的視座を培っていった。こうした視座が、後述するように母、つまり村の女の歴史を自らの生き方を通じて書き換えようとする小原のリブ思想へと接続するのである。

## 2-2. 『ささえ』の創刊

小原は成田青年会の内部指導者として精力的に活動していく中で、1959（昭和34）年、岩手県青年団体協議会の集会で出会った岩手県各地域の女子青年リーダーたちと、女性だけの生活記録文集『ささえ』（岩手県青年団体協議会「岩手女子青年グループ」編、1959年創刊号～1963年8号）を創刊する。「仲間の/強く生きる姿に/ささえられて/わたしも/一人の/ささえ手に/なろうと思う。」という巻頭言にもあるように、『ささえ』が目指したのは地域で活動する女子青年が、互いに活動の「ささえ手」となるような、緩やかなつながりの結節点となることであった。寄稿者の活動地域を見ると、北上市、江刺市、花巻市、花巻市、玉山村、紫波町、矢巾町、住田町、大船渡市など、県下全域に渡っている。中には出稼ぎ先の石川県から寄稿する者もあった。



写真2 『ささえ』創刊号

女子青年達は1960（昭和35）年6月25～27日には北上市六原青年の家で泊まりがけの研修会を実施し、家制度からくる「嫁」の立場を具体的な問題を出しながら話し合うなど、積極的に活動を行っていた。こうした女子青年達に対し、「よく出歩く娘」という風評が流され（小林末子「女子青年と青年団活動」『ささえ』1号）、「あんまり歩くと、嫁ッコの貰い手が無くなるばかりなんだ。そんな暇があったら少し女らしく裁縫でもしてねすか」（藤沢ミヤ「母への手紙」『ささえ』3号）と言われながらも、女子青年達は「農村青年にとって唯一の修養場所」（小原千恵子「ある日の生活日記」『ささえ』3号）であり「一つの解放の場」（藤沢ミヤ「無題」『ささえ』3号）である青年団活動へと出かけていった。

『ささえ』は、生活記録文、詩、手紙、日記などで構成されている。主題については、「女子活動家」として女子青年の青年団活動に対して意見を述べる文章が多く見られるほか、女性が職場で受ける性差別についての文章も散見される（照井広子「仕事と女性」『ささえ』3号など）。

特に興味深いのは5号において展開された「新しい妻のあり方」を巡る論争である。小林（村上）末子による「新しい妻のあり方」と、それに対する反論である。小林は結婚した女性は「ただ家庭的であってよいのか」と問い、結婚後も「人間的成長」を続けていきたいと述べる。この小林の主張に対し、青年団活動で学ぶ事項が「自己満足であったり自意識過剰」であるならば「社会においても家庭においてもマイナス」であり、「新しい妻」は「最も家庭的であってしかるべき」（安部憲子「新しい妻に一言」同号）であるという反論が寄せられる。それに対しては青年団で学んだ理論を活かし、「家庭婦人」となっても社会参加、政治参加の権利を行使していくべきである（三浦輝子「新しい妻のあり方に」同号）という再反論が寄せられた。

『ささえ』において旧来の女性のありように異議を申し立て、新しい女性の生き方について盛んに議論された時代的背景には、自己確立に向けて格闘する「女子青年」という新しい主体の誕生がある。戦前、処女会・大日本連合女子青年団は、農村女子青年の目指す姿として「働妻健母」を掲げた<sup>24</sup>。若い女性にとって自己確立に向けた格闘の時期としての「青年期」は存在せず、娘時代とは良き妻、健康で賢き母となる準備にいそしむための時期であった。新憲法の制定後、若い女性たちは生き方の確立に向けて、新たな学びを展開するに至るのである<sup>25</sup>。このような潮流の中で、新しい女性の生き方を探りて創り上げていこうとする『ささえ』上の主張には、「良妻賢母」を「到達せねばならぬ最大の目標」（村上幸子「父親よ、くたばってしまえ」『ささえ』3号）であ

るとするなど、女子青年にとっての青年団活動は、よき妻となって民主的な家庭を築くための修養の場であるという認識が多く見られる。

そうした論調の中、小原は「青年団の限界は結婚した会員の行方にある。〔略〕（結婚した人間に期待はすまい。）これは私の一つの哲学だ。〔略〕結婚すれば家の中にのみ引きこもってしまう。何と多くの連中だったろう。」（小原麗子「あとがき」『ささえ』5号）と明言する。「嫁」に行くことを拒否し続け、19歳にして経済的自立と自己表現の時間を持てる「自活」を目指し「女中奉公」に出た小原の思想は、新しい女性の生き方を求めるものの女性の本分をあくまでも「妻」「母」に定める女子青年たちの中において異質であったと言えよう。小原が『ささえ』8号に発表した「ゆるしてください がっちゃんー [お母さん]」は、「嫁」に行き、「家」に入って一生を終えることに対する反発と自我の叫びを詩に昇華した、300行に渡る17歳から20歳までの自伝風叙事詩である。

許して下さい がっちゃんー/わたしが今 なにをし なにをすることによって/母を しあわせにしてやれるか/わかっていても/それが母にしてやれるわたしの唯一のもので/あることを しっていて/許して下さい がっちゃんー/はじめて書く母への詩が  
こうして/書きださねばならぬとは/許して下さい がっちゃんー/（呪いあれ！わたしの血よ！）（小原麗子「ゆるしてください がっちゃんー」『ささえ』8号）

娘を「片付け」ることで子育てが終了し、嫁ぎ先の社会階層が親の甲斐性の表れとなる文化のなか、「嫁」に行くことが「がっちゃんー」にしてやれる「唯一」の「孝行」であると分かっていても、「わたしにひそむ血は/納得がいかなぬ/納得がいかなぬ/と叫びたぎっている」娘に対し、「なんのたたりで一人の娘も嫁がせかねるのか」と母は嘆く（小原麗子「村・身の置き場のない娘たち」『俗天』4号、1975）。「村」の「娘」に課せられた「掟」、つまり「嫁」に行き、農業の重労働と家と家族への再生産労働に従事するという農村におけるジェンダー規範に従わず、掟破りの人生を望んだゆえに追いやられた身の置き場のない状況を、小原は「呪い」と表現する。「母の時代にはなかった光あるものを」求めて「村の掟」から逸脱しようとする「呪われた血」が求めるのは、経済的に自立し、自分の時間を持って読書も勉強もできる人生であった。

「妻であることもよし、母であることもよし、だが、その前に一人の人間でありたいために書いてゆくんだ」（小原麗子「あとがき」『ささえ』3号）という確固たる小原の姿勢の根底にあるのは、「家」と「国」に詫びて自殺した姉の存在であった<sup>26</sup>。姉は持病の痔瘻の療養のための入院中に夫戦死の報を受ける。そして「一九四五年六月、三キロの道の夕暮れ、足を引きずり歩いて、自らの命を絶った」（小原麗子「姉のこと」『ささえ』3号）。遺書は婚家の姑に宛てた「母上様お許しください。」という言葉から始まり、実家の母<sup>27</sup>には、「戦地で戦っている兄さん〔夫〕に申し訳ない」「国の非常時に死んでゆくのは申し訳ない」、「許してください」としたためられていた（同前）。姉は「銃後の護り」を果たす嫁として生きることを課せられ、自死に追いやられた。戦争と性差別の交差した地点に位置し、二重の犠牲者となったのである。小原は姉を死に迫りやり、自分も「つぶされる」と感じた「家」制度への抵抗として「嫁」へ行かないという生き方を選んだのだ。

### 3. 生活記録運動とリブー〈おなご〉による自己表現

ここからは小原が1950年代から60年代前半にかけて携わった青年団運動および生活記録運動における「書く」という自己表現活動と小原のリブ思想形成の連関について考察していきたい。

生活記録運動を研究する辻智子は、社会教育、女性史・フェミニズムによる1950年代の女性についての評価を3つの立場に大別する。1つ目は女性が社会活動の主体となり、地位向上が促進され、主体性が形作られていった点にその意義を見いだす立場、2つ目が性役割およびジェンダーを問題化しなかった点において、1970年代以降の第2波フェミニズムと断絶していることを強調する立場、3つ目が1950年代の女性達も妻母主婦という役割への疑問や違和を表明していることから、70年代のリブを、それ以前の草の根の女性達の歩みと重ねて捉える見方であり、辻自身も東亜紡織泊工場における生活記録運動の分析を通じ、生活記録運動とフェミニズム・リブは接続的と見る<sup>28</sup>。本稿で扱った『ばんげ』『ささえ』における女子青年たちの主張についても、女であることの生きがたとそれが由来する社会的要因への視点を内包しているという点で、同様のことが言える。鹿野政直が指摘するように、「暮らし」を主題とすることで、国家本位・男性本位というそれまでの枠を問い、女性と男性を規制するいびつさを意識に登らせ、やがてくるフェミニズムの芽を養うことができたのである<sup>29</sup>。

こうした生活記録運動の方法論は青年団以降の小原の活動にも引き継がれていく。1960年代以降は『微塵』『ゲェ・ダ・ゴ』などの地域詩誌の編集に携わる一方で『サワ・ひとりのおんなに』（1967）を皮切りに個人詩集を複数上梓し、生活記録派の詩人として活躍する。一方で1976年より個人誌『通信・おなご』の発行を開始、同時期には石川純子らと共に女性達の自己学習会「おりづらん読書会」を始め、1984年には女性達の集まる場所として、自宅を兼ねた「麗ら舎」を設立、女性達の自己学習会「麗ら舎読書会」を始める。1985年からは読書会会員の詩や散文を載せた年刊『別冊・おなご』の刊行を継続している<sup>30</sup>。

小原の主導するこれらの活動の中で、女性達は「嫁勤め」や「お産」といった個人的な経験を話し合い、文章化し、文集として公表することで共有していく。これらの作業は都市部リブにおけるコンシャスネス・レイジングの方法と共通する。リブ達は性差別の経験や自己のジェンダー意識などを語り合うことで意識変革を試みた。生活を自らの言葉で綴り、仲間達で話し合い、文集として公開することで、普段は個々人が抱え込みがちな苦しみや疑問を女性同士で共有し、それが「女であるわたしたち」の問題であると捉え返していったのである。女性を抑圧するジェンダー意識と構造を批判的に捉える小原が持つリブの視座は、暮らしの中から問題を提起し、仲間たちで話し合い、書いていくという生活記録運動の中で培われていったと言える。

このように生活記録運動の持つ方法論はリブ的な問題意識を培う土壌となったが、先述した通り青年団運動の中には近代的で民主的な家庭を築き、一労働力ではなく家事、育児の主体としての地位を確立することで農村女性の地位向上を図ろうという意識もあった。女子青年のリーダーとして活躍してきた小原に対して、家の中に入り民主的な家庭を築くモデルとなることを強く期待する周囲の圧力が存在した。

女子青年のリーダーたるもの農村に嫁ぎ、古きをなおし、新しく生きてゆかねばならぬのだと、彼ら（引用者註：青年団の仲間）は言うのです。…男の横に、出来るならやさしい気持ちで並んでみたいのに、…「家」の中で、男と女が並べば、「家」はバランと崩壊することは、明らかなのです。（小原麗子『『家』＝むらの中の声』『思想の科学』第6次15号、1973）

小原は、筆者のインタビューに対し、彼女のウーマンリブの捉え方を次のように述べている。

（従前の農村婦人運動は）農村の女性の地位向上でしたよ。家庭の中はそのまんま。だけども女の人たちはここ（家）に入ってしまったら終わりだつづのが私の発想なわけですよ。ここで私は摩滅するだろうって。だけど麗子さんみたいに、農村の女子青年のリーダーをやってきた人が、〔略〕同じね、お袋の辛さをね、自分が経験しないで何が女性の地位向上だって、この批判には私は身に堪えましたね。〔略〕だけども私にとっては家の中が問題、家が問題だったんですよ。あそこに入ると潰されるっていう。だからこの中に入った時のことを問題にしたのがウーマンリブだったような気がします。〔略〕ウーマンリブは知らなかったけども、生き方としては、それをやってた（笑）。<sup>31</sup>

「家」は女性の抑圧によって成り立つ制度であって、女性がその中で「新しく生きてゆ」くことは構造的に不可能であり、改良主義的な方法では決して農村女性の立場は改善しないというのが小原の思想であり、「嫁がないこと」はその実践としてあった。小原は、リブを「家庭の中にこそ」女性が苦しむ「問題」があるのだと初めて論じた運動だと評価し、自分は「ウーマンリブを知らないで一人でもがいてた」のだと語る<sup>32</sup>。「自らの性＝生＝リブを問う」（『女・エロス』創刊の辞）や「東大LIB&V」（グループ名）という言葉が表すように、リブには「女であるわたし」の「性」と「生」をリンクさせ、生活や生き方そのものが運動であるとする思想があった。

井上輝子はリブの目指した「女としての意識改革」を、女であるが故に親や社会から期待され、要求されるあらゆる文化的事象に疑いの目を向け、ステレオタイプ化した女性像にとらわれない行動様式、人生コースを選択することだと説明する<sup>33</sup>。この意味において農村の娘に課せられた「村の掟」から逸脱し、自らの人生を歩むという小原の生き方はリブそのものである。ここで重要なのは、小原がこうした生き方としてのリブを地域の中で、あくまでも農村の女性として、つまり〈おなご〉として実践したことである。「嫁がない」という生き方を選択した小原は、嫁いだ農村女性が経験する類の「辛さ」や「苦しさ」を「分からないで何を書いてる」のかと皮肉を言われることも少なくなかったという。しかし小原はそうした農村から飛び出すという選択をしなかった。

やっぱり地域の中でやらなきゃ物事変わっていかない。生活記録運動の、身の回りにこそ問題があるんだっていう発想、それが身についてるのかもしれないね。〔略〕私が抱えてる問題は、農村の女性の問題だからね。それが北上とか成田とか岩手県じゃなくって、日本全体が抱えてる農村の問題で、そして私が女性とかなんかで嫌な思いをしたことは、結局その韓国の女性とか世界中の女性が抱えてる問題に普遍化してくっっていくことなんだろうね。<sup>34</sup>

「自分の抱えてる問題」とは、つまり農村において女性であることを理由に直面する問題である。都会に出る

ことで、地縁や血縁から自由になったとしても、小原が最も解決したい東北の農村女性である「私」の抱えている問題が根本的に解決されるわけではないという視座である。小原にとって、農村の中で「書く」という自己表現行為が、農村のジェンダー意識と構造への抵抗であり、問題解決の手段であった。

（昭和37年女子研修会の）生活記録、読書活動分科会には、自分たちの生活を素材にした小説や脚本を書く女子青年も、集まってきたのでした。農村婦人が書くことによって、自分たちの姿を叩きこわしてゆくように、農村の女子青年という一般的なイメージが壊れていくであろうほど、バラエティーに富んだ女子青年がふえて来るであろうことの、一つの現れでもあったのです。（小原麗子「あとがき」『ささえ』7号）

鶴見和子は著書『生活記録運動のなかで』において、「生活記録運動とは、歴史をつくる国民が、国民の歴史を書き、書くことをとおして自分たち自身をつくりかえていく運動」と定義する<sup>35</sup>。女性達を書くことや読むことは「ぜいたく」だとされ、「女ごだがらなァ、学校さ入れだってなァ、それよりも嫁ごにける[やる]だ。」（小原麗子「女中奉公ということについて」『通信・おなご』7号、1977）と言われる農村のただ中で、女性だけで集まりを持ち、書き、文集を編むという行為そのものが、農村女性のステレオタイプを自ら変革していくリブ運動だったのである。

こうした小原の自己表現活動を象徴するのが、書くことによって「自分で自分の生を編む」という表現である。

自己表現と自由は、一体です。つまり、わたしの姉のように国や夫に詫びて死ぬことの無いよう自分の人生は、自分で編むために、ということになりましょうか。（小原麗子「麗ら舎十周年のつどい」麗ら舎読書会編『駄句はじける』麗ら舎読書会、2003）

家と国家による女性の抑圧に対した忍従するのでもなく、「田を作るのを辞めて詩を作り始める」のでもなく、「田を作り詩も作る」自己表現活動によって〈おなご〉の歴史を書き換えていくのである。

## おわりに

1950～1960年代にかけて、小原麗子は岩手県北上市周辺における青年団活動および生活記録運動の牽引役となってきた。自分の生活や経験を自分自身の言葉で書くことによって社会認識を深め、自己の内面を変革していく自己教育運動である生活記録運動を通じ、小原は個人的な問題を“農村女性であるわたしたち”の問題として認識し、女性を抑圧する構造を意識に登らせるリブの視点を形成していった。1970年代以降の小原の活動もまたこれらの運動の系譜にある。若き日に農村青年達が自己形成の一つとして「青年団を越えてさらに書くこと」<sup>36</sup>を継続できるかが肝腎であると主張した小原は、自らが書き続ける実践者として、「書くことが運動として展開する歴史」<sup>37</sup>を今も作り続けているのである。

今後の課題として、1970年代以降の小原の主な活動の舞台である「麗ら舎」読書会の位相の解明が挙げられる。石川純子など「麗ら舎」に集う女性達との交流によって、小原の思想はどのように深化したのか、また読書会会員にとって「麗ら舎」で書き、学ぶという経験はどんな意味を持つのかを検討し、岩手のリブの思想と運動の全容解明に挑みたい。

## 註

- 1 井上輝子「ウーマン・リブの思想」田中寿美子編『女性解放の思想と行動 戦後編』（時事通信社、1975）、天野正子『「つきあい」の戦後史—サークルネットワークの拓く地平』（吉川公文館、2003）、柳原恵修士論文「岩手におけるウーマンリブ—〈おなご〉という視座」（未刊行、2007）等。
- 2 江原由美子「日本のウーマン・リブ」『岩波女性学事典』（岩波書店、2000）等。
- 3 1970年以前および1977年以降にもリブと呼べる問題意識を持った個人やグループが存在している点にも注意が必要である。例えば、『「れ・ふあむ」女性問題研究会』（神戸外国語大学）は1962年から、「メトロパリチェン」（札幌市）は1968年ごろから活動している。また溝口明代・佐伯洋子・三木草子編『資料日本ウーマン・リブ史Ⅰ～Ⅲ』（ウイメンズブックストア松香堂、1992、1994、1995）には1983年までの資料が収録されている。
- 4 藤枝滯子「日本の女性運動—リブ再考」『女性学年報』第11号、1990
- 5 石川純子（1942—2008）は1965年東北大学教育学部卒業後、岩手県水沢市（現奥州市）の私立高校に国語教師として赴任する。1970

- 年前後に小原麗子と知り合ってから以来、彼女の思想に共鳴し、晩年まで活動を共にしてきた。石川は麗ら舎読書会を拠点として『まつを  
 唄ー百歳を生きる力』（草思社、2001）、『さつよ唄ーおらの一生、貧乏と辛抱』（草思社、2006）といった東北の「農婦」の聞き書き本を  
 上梓する。石川が自らの妊娠・出産の経験を通じて打ち立てた、女性の性と身体性を問う「孕みの思想」については稿を改めて論じたい。
- 6 辻智子「農村で女が『生活を書く』ということ」『国立婦人教育会館研究紀要』第2号、1998
  - 7 1960年には61であった北上市内の工場数は、1965年には100を超えた。従業者数も1960年から1973年の間に1,430人から5,434人へと3.8  
 倍に増加した（須山聡「北上市における工業化にともなう農村の変化」『地域調査報告』第13号、1991）。こうした歴史を反映し、北上  
 市の2009年における製造品出荷額は3,640億円と県内第1位となっている（北上市企画部政策企画課編『平成22年版 北上市統計書』北上  
 市、2011）。
  - 8 岩手県農地改革史編纂委員会『岩手県農地改革史』不二出版、1990、299頁
  - 9 北上市役所庶務課編『北上の統計』北上市役所、1955
  - 10 岩手県青年団体協議会編『青年団20周年記念誌』岩手県青年団体協議会、1972
  - 11 岩手県社会教育課『岩手の社会教育 青年教育婦人教育ー青年教育婦人教育の現状と問題点』岩手県教育委員会、1956
  - 12 中学卒の勤労青年のための補習教育や戦後の民主主義教育を中心とし、公民館を拠点に週1回程度開かれた。
  - 13 大串隆吉は、長野県の戦後の生活記録運動は生活綴方運動の影響を受けながらも、昭和初期から戦時体制までの間に行われた青年団  
 の機関誌発行や新聞の生活雑記欄の活動が引き継がれているという中島正美の記述（「長野県の生活記録運動」『農村の変貌と青年の学  
 習・日本の社会教育第6集』国土社、1961）を踏まえ、戦前の生活記録が戦後のそれと共通の基盤・課題を持っていたとしたら、生活  
 記録は婦人と青年が抱えてきた問題を解決する方法として自生的に生まれたことを意味し、戦後の生活綴方教育の産物とのみ評価する  
 わけにはいかないと述べる（「生活記録運動-戦前と戦後」『人文学報』第16号、1981）。小原が『ばんげ』創刊当初、生活記録運動を  
 知らなかったという証言と併せて考えるべき点であろう。
  - 14 高橋啓吾「北方教育運動」岩手放送岩手百科事典発行本部編『新版 岩手百科事典』1988
  - 15 「人生雑誌」とは上級学校へ進めなかった「地方」の勤労青少年のための人生記録雑誌である。誌面は生活記録、手記、自伝、特定テ  
 マでの意見交換等の投稿で構成され、読者が同時に投稿者でもあるという特徴があった（天野正子前掲、81-94頁）。
  - 16 川村愛子「和賀地方の文集活動分布の状況」岩手県青年団運動研究編著『青年若妻生活記録運動史』岩手県青年団体協議会、1962
  - 17 斉藤彰吾「母と村の考察ー生活詩における小原麗子の側面」『真なるバルバロイの詩想ー北上からの文化史的証言（1953ー2010）』コー  
 ルサック社、2010、60-61頁
  - 18 吉田六太郎「青年団体機関誌活動の推移」岩手県青年団運動研究編著『青年若妻生活記録運動史』岩手県青年団体協議会、1962、50  
 頁
  - 19 千田茂光「生活記録」北上市青年団体協議会編『北上青年運動史』北上市青年団体協議会、1965
  - 20 斉藤彰吾前掲、56頁
  - 21 筆者による小原麗子へのインタビューより（2008年実施）。
  - 22 小原麗子「成田を中心とする北上地区（沢内を含む）の生活記録」前掲『青年若妻生活記録運動史』
  - 23 筆者による小原麗子へのインタビューより（2008年実施）。
  - 24 渡邊洋子「働妻健母ー農村の良妻賢母」原ひろ子・館かおる編『母性から次世代育成力へ』新曜社、1991、93-99頁
  - 25 矢口悦子「地域青年集団における女性の位置と学習の展開 その1ー青年団の女性活動（女子活動）の歩みを中心に」『山脇学園短期  
 大学紀要』第38号、2000
  - 26 姉の自殺という経験が小原が家や結婚制度を問題化する契機となった点に関しては稿を改めて詳細に論じたい。
  - 27 姉にとっては義母である。姉が義姉であったことを小原が知るのは姉の入院中に聞いた近所の人の噂話によってである。
  - 28 辻智子博士論文「生活記録サークルの実証的研究ー1950年代女性繊維労働者における書くことの集団的实践と自己形成」（未刊行、  
 2010）
  - 29 鹿野政直『現代日本女性史ーフェミニズムを軸として』有斐閣、2004、16頁
  - 30 同年、小原は北上市出身の戦没農民兵士高橋千三とその母セキを弔う年忌「千三忌」を開始する。「千三忌」は麗ら舎読書会の活動の  
 中核の一つとなっている。
  - 31 筆者による小原麗子へのインタビューより（2007年実施）。
  - 32 筆者による小原麗子へのインタビューより（2007年実施）。
  - 33 井上輝子前掲、218頁
  - 34 筆者による小原麗子へのインタビューより（2008年実施）。
  - 35 鶴見和子『生活記録運動のなかで』未来社、1963
  - 36 小原麗子「成田を中心とする北上地区（沢内を含む）の生活記録」前掲『青年若妻生活記録運動史』、136頁
  - 37 小原麗子同前、同項